

一般講演

1 開設1年間における「ことばクリニック」受診状況について

○青木 さつき¹⁾, 入山 満恵子²⁾, 大平 芳則²⁾, 伊東 節子^{1,2)}¹⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック, ²⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻)

【緒言】明倫短期大学附属歯科診療所「ことばクリニック」は、2004年10月1日に開設され、1周年を迎えた。歯科診療所という歯科単科に併設された言語治療施設は全国で初めての試みである。そこで、本施設における1年間の受診状況について分析し、本施設の今後さらになすべき事柄などを考察した。

【方法】1. 1年間の受診状況, 2. 初診時年齢, 知的能力, 言語障害の要因, 紹介元および居住地, 3. アンケートにおいて受診頻度, 診療内容, スタッフの対応について調査を行った。

【結果】1. 1年間の受診患者数は210名であった。新患者は開設時10月に61名, その後は月平均11名であった。昨年5月, 本クリニックの紹介記事が新潟日報により掲載された。そのためか6月以降新患者数が月平均17名となった。2. 年齢層は成人患者(30歳, 48歳)2名, 彼は1歳から17歳までで中でも小学校2年生以下が180名と大半を占めた。言語障害の要因としては広汎性発達障

害33%, 染色体異常が25%であり多数を占めた。紹介元は専任言語聴覚士の前任地である新潟市民病院からの継続患者が33%, 新たに市民病院からの紹介が17%であり, これらが5割を占めた。また, 新聞を見て, あるいは知人からの紹介も各12%認められた。居住地では北は村上市, 南は南魚沼市, 東は阿賀町と広範囲に及んだが, 約3割は旧新潟市の西地区および中央地区であった。3. 保護者の“満足度”が非常に高かった。しかし“受診頻度”を増やしてほしいという要望も高かった。

【考察】本クリニックでは, 受診患者数(収益)および地域貢献に関する開設当初の目標はほぼ達成できたと考えている。今後は他機関が受け入れていない学童などの年齢層, 夕方・土曜日などの診療, 軽度発達障害などに対応できる施設として周辺からの期待がさらに大きくなると考えられる。したがって, クリニック側としてはその対応策が課題となっている。

2 歯科医療と言語聴覚療法の連携

○大平 芳則¹⁾, 入山 満恵子¹⁾, 丸山 満²⁾, 青木 さつき³⁾, 水橋 庸子⁴⁾¹⁾ 歯科衛生士学科専攻科保健言語聴覚学専攻, ²⁾ 歯科技工士学科, ³⁾ 附属歯科診療所ことばクリニック, ⁴⁾ 附属歯科診療所)

【はじめに】平成16年10月に開所した本学の歯科診療所ことばクリニックでは, ことばについての訴えを持つ方への支援はもちろん, それと同時に, 歯科医療との連携による医療サービスを提供してきた。そこで, 開設以来1年間の歯科医療と言語聴覚療法との連携の実態を報告するとともに, 今後の両者の連携について考察する。

【対象】平成16年10月から平成17年9月までの1年間に, ことばクリニックに入室し言語聴覚療法を受けた全患者212名を対象とした。

【連携の実態】対象者212名のうち, 歯科医療も受けた者は49名(23%)であった。そのうち, 歯科の問題を主訴として当診療所を受診しその後言語聴覚療法も受けた者(D群)が3名, ことばの問題を主訴として当診療所を受診しその後歯科医療も受けた者(L群)が46名であった。D群3名は全例成人, L群46名は全例小児であった。

L群46名の患児が受けた歯科医療の内訳は, 治療のみ

を受けた者19名, 健診のみを受けた者6名, 予防処置のみを受けた者14名, 治療と予防処置を受けた者7名, であった。

D群3名のうち2名は, 義歯適合の客観的評価に関して, 担当歯科医師より依頼があった患者である。ことばクリニックでは, 構音を評価することにより義歯の適合状態を評価した。その結果, 2名とも聴覚印象的評価では明らかな構音の障害を認めなかったが, 1名では音響学的手法による評価で患者の訴えと合致する結果を得た。

【考察】構音を音響分析により評価するというあまり普及していない方法を用いて, 患者2名のうち1名については, 義歯の適合状態について客観的な評価を行うことができた。これは, 歯科医療と言語聴覚療法との密接な連携により可能であったと考える。今後, 両者がいっそう連携することによって, より多様で質の高い医療サービスを提供できる可能性がある。